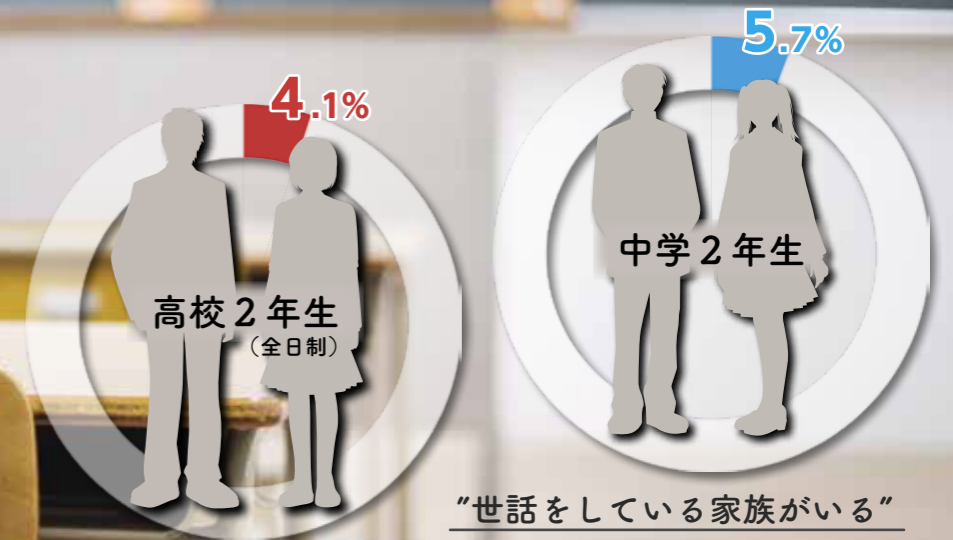


ヤングケアラーについて かんがえよう。



“世話をしている家族がいる”
出典：厚生労働省・文部科学省 “ヤングケアラーの実態に関する調査研究” 令和3年3月

近年、社会問題として取り上げられることが多い「ヤングケアラー」。日常的にケアを行い、家庭を支えなければならぬ子どもたちの背景には何があるのでしょうか。今月の特集は、ヤングケアラーの実態と課題、そして私たちは子どもたちにとって接していけばよいかについて考えます。



- ### ヤングケアラーが担うケアの例
- ▶ 病気や障がいのある家族の世話・看病・介助をしたり、代わりに家事をする
 - ▶ 幼いきょうだいの世話をする
 - ▶ 心が不安定な家族の話を聞く
 - ▶ 家計のために働き、家族を支える
 - ▶ 日本語が話せない家族や障がいのある家族のために通訳をする

この数字は、国が令和2年度に中学2年生と高校2年生(全日制)を対象に初めて実施したヤングケアラー実態調査の中で、世話をしている家族が「いる」と回答した子どもの数です。この結果は多くのメディアが取り上げ、世間に驚きをもって受け止められました。

ヤングケアラーとは何か

テレビや新聞で聞くことが増えてきたこの言葉。国の法令上の定義はありませんが、一般に、**本来大人が担うと想定されている家事や家族の世話などを日常的に行っている子ども**とされています。

ヤングケアラーはさまざまな形で存在するとされ、ケアの内容・相手・負担の程度は、子どもや家庭の状況によって異なります。

問題の背景には

近年、この問題が広く注目を集めるようになった背景として、共働き世帯が一般化してきたことなどが挙げられます。高度経済成長期の頃のような、メインとなる働き手がいて、家事に専念する大人がいて、より時代から経済の状況が変わり、より多くの人が働きに出るようになり、核家族化が進み、家庭にかかる時間が少なくなる中で、働いている親の代わりに子どもが家の中のことをやるといのが、人手の足りていない家庭ほど顕著になってきました。



子どもたちが抱える負担と誰にも相談できない孤独感。



子どものときにしか経験できないこと。その後の人生への影響。

なぜ問題なのか

子どもが家事をお手伝いしたり、家族の世話をすることは、責任感や社会性、生活力を身につけるうえで大切なことです。しかし、それが子どもにとって重い負担となっている場合、ヤングケアラーとしての問題が浮かび上がってきます。

埼玉県が令和2年度に県内高校2年生約55,000人を対象に実施したヤングケアラー実態調査(以下、県実態調査)の結果とともに見ていきます。

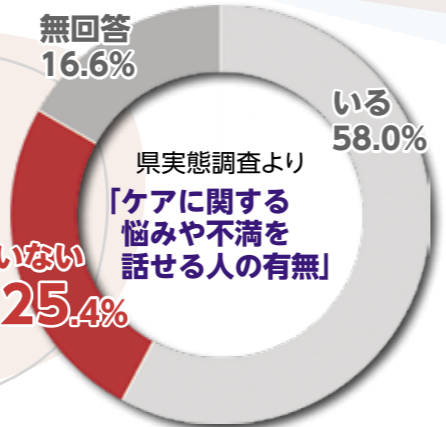
ヤングケアラーの問題とは。

自覚がない

子どもは自分の家庭しか知らずに育つことが多く、客観的な視点を持ちにくい。負担を抱えている**現在の自分の状況が当たり前**だと感じてしまう場合がある。

相談できず孤立しがち

家族以外の大人に相談する経験が少なかったり、または**信頼できる大人が周りにいない**こともあるため、悩みを一人で抱えて周りから孤立しやすい。



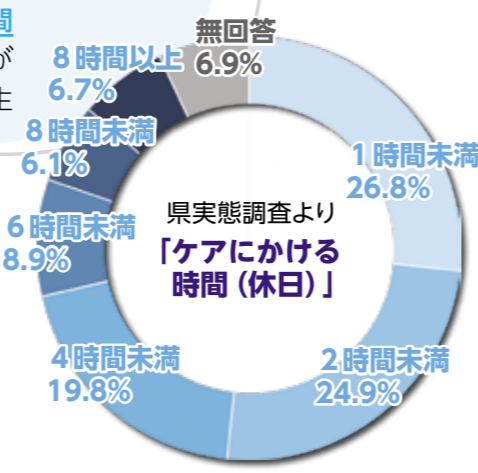
家庭の問題は気付きにくい

家族が病気や障がいを抱えていることを**知られたくない**と感じ、秘密にする場合や、大切な家族なので**自分がケアしたい**という思いから、誰にも頼らずに頑張ろうとする子どももいる。

進学や就職に影響する

家事などを担うことが過度の負担となっている場合、**勉強時間が十分に取れなくなる**可能性があり、進学など、その後の人生への影響が懸念される。

- 県実態調査より ※複数回答
「**学校生活への影響**」
- 影響なし...41.9%
 - 孤独を感じる...19.1%
 - ストレスを感じている...17.4%
 - 勉強時間が十分に取れない...10.2%**
- (回答の多かった上位4項目)



※県実態調査の詳細は県ホームページをご覧ください。



ヤングケアラーとSDGs



持続可能な社会を目指すためには、次世代を担う子どもたちの健康や福祉、質の高い教育の提供が不可欠であり、ヤングケアラーの問題はSDGsとも深い関係があります。